

## リルケとプラーク（その2）

水 沼 和 夫\*

### Rilke und Prag (II)

Kazuo MIZUNUMA

#### Abstract

Die Absicht des folgenden Versuchs ist darauf, was für Funktionen die spezifisch-Prager Situation in der Jahrhundertwende, in der er 1875 geboren war und sich vergeblich um eine vertraute Umgebung bemüht hatte, auf den Existenzentwurf bei R.M. Rilke ausgeübt hat. Das Thema ist zwar einmal in dem vorangestellten Aufsatz "Rilke und Prag (I)" (1983), nur halbwegs, behandelt worden, aber man kann sich die hier fortzusetzende Studie auch für eine einzelne halten.

#### I. 乏しき故郷

R.M. リルケは1875年12月4日、当時のオーストラリア＝ハンガリー帝国第三の都市プラークに生れたが、この古里の街がドイツ人である彼に及ぼした影響は、極めて独特なものだった。それは歴史的條件、特にハーブスブルク家によるボヘミヤ支配の歴史が規定したものと言えよう。ドイツ人に対するスラブ諸民族の怨念は、19世紀後半になって、この国の国家的統一を危ういものにする。彼らの要求を和らげるためのウィーンの譲歩は、ドイツ人の反動を促し、民族的対立は激化の一途をたどった。プラークのドイツ人は上層階級をほぼ独占する集団だったが、農村から流入してくる大量のスラブ人によって、徐々に片隅に押しやられ、19世紀末にはプラーク全人口の僅か5パーセントを占めるにすぎなかった。それでもボヘミヤ在住のドイツ人の中心だったこのプラークは、それ自体、スラブ民族の中に取り残され、本来のドイツ語圏から孤立していたのだった。

その後の歴史的経過から言って、プラークのドイツ人はやがては退かなければならない運命にあったのだが、表面上華やかな社交生活を必然であるかのように享受していた当時の彼らに、そうした危機感を感じ取る能力がまだ残されていたかどうかはわからない。それに対して、幅広い下層階級をなしていたチェコ人社会が、その忍従の姿勢の内面で、いかに活力に満ちていたことか。第一次大戦後のチェコ独立——この独立が一時的なものに過ぎなかったにしても——によって、この街が名実ともにチェコ人の都になったことは、リルケ自身も生きて体験するところとなった。

このような、当時の刻々と流動してゆく社会状況を考えるなら、リルケがこの国の伝統とほとんど無関係だったこと、またそれ故に、彼にとっては第二、第三の故郷が——たとえば、ロシア、あるいはパリが——より大きな意味を持ちえたであろうことは、想像に難くない。しかし、これら諸体験の意味を論ずる前提として、彼と第一の故郷との間に在ったネガティブな関係もまた、リルケのような種類の詩人<sup>1)</sup>においては特に、重要であると言わなければならない。純然たるドイツ系オーストリア人であることを自ら認める彼が、晩年になっても尚「古里という感情がはじめて私に

昭和59年11月5日受理

\* 一般教育部

訪れたのは、1899年のモスクワでのことです<sup>2)</sup>などと言うとき、プラークでの比較的短かった時代が、大きな問題になってくる。プラークの特殊な状況のなかで、年若いルネ・マリーア・リルケが如何にして、その古里の街に関与しようとし、それを果せなかったか、ということは、彼の幼年時代との関連において、また彼の文学世界全体との関連において、多いに興味深いことであると言える。

『ふたつのプラーク物語』は、若いリルケによる、プラークへの、特にチェック人社会への共感の可能性を追求したものと解するなら、極めて意味深いものだ。その第一の物語『ボーフシュ王』のなかで、リルケは主人公のチェック人青年をして、次のように言わせている。

ドイツ人はいたるところにいます。そして、ドイツ人は憎むべきものです。でも、何のためになるんですか？ 憎しみは悲しくさせるものです。何でもしたいようにするのがドイツ人ですよ。何しろ、彼らはぼくらの国を理解しないからです。それで彼らは、ぼくらからこの国を取り上げることは永久にできないのです。国境には、確かにドイツ人がしっかりと根を降している大きな森や山があります。違いますか？ でも、彼らはこの国を取り巻いているにすぎないじゃないですか。そのなかにあるもの、たくさんの畑や草地や河は、これは、ぼくらの古里です。これは、ぼくらのものであって、ぼくらはぼくらの内部のすべてによって、これらに結び付いているのです。<sup>3)</sup>

長い間オーストラリアの支配を甘んじて受けてきたチェック人は、当時民族独立のための重大な局面をむかえていた。この物語に登場してくるもうひとりの主要な人物レーツェクのように行動的なチェック人がいる一方には、そうした動きに無関心を装う大多数の、いわゆる善良なチェック人がいた。今日の視点から見ると、後者のようなチェック人にみられる姿勢こそ、チェック人本来の特質であり、彼らの民族的悲願を達成させたのは、そうした姿勢にあったと言えよう。リルケが転換期のプラハを目のあたりにしながら、この物語の主人公に仕立てた青年ボーフシュは、その典型的特質をそなえている。彼は学生活動家レーツェクのような政治的関心など少しも抱いていなかったが、ドイツ人を憎むことは知っている。それは、幼い頃に既に植えつけられた憎しみなのだ。彼がその憎しみに疑いを持つのは、彼のような忍従の姿勢をとる者にとって、ドイツ人の高慢さにさえ眼をつぶれば、祖国は相変わらず彼らの祖国だと感じることができからだ。そして「ぼくらはぼくらの内部のすべてによって」古里と結び着いている、と感じられる限り、彼は無力ではない。

リルケは憎まれるべきドイツ人として、ドイツ人社会に対し、敢えてこの物語を贈った。その意図は幻想と抒情によってぼかされているものの、それが、政治的というよりは人間的な意味での共存、あるいは連帯の可能性を求める傾向にあることは否定し難い。第二の物語『兄妹』の構成と人物設定は、それを象徴的に現わしているかのようだ。即ち、ヨゼフィーネ・ワンカの亡夫は〈善良なチェック人〉であり、田舎を引き払ってプラークに越してきた未亡人一家に、間接的に援助を与えることになるのはドイツ系退役軍人の家庭なのである。息子ワンカ青年は敢えてチェック系大学を選び、地下活動に巻き込まれて不幸な死をとげる。そして傷心の妹ルイーザが心を開く相手は、もはや学生活動家レーツェクではなく、貧しい境遇に育ったドイツ人青年エレンスト・ラントなのである。

ドイツ人のリルケが、このような形で、プラークのチェック人社会への参入の姿勢を示したことは、注目に値する。しかし、それが如何に現実性に欠けた要求であったか、ということは、既に述べたように、リルケ自身も確認するところとなるのだ。

リルケより十数年遅くブラークに生まれ、ブラークで暮し続けた（1958年没）パーヴェル・アイズナーは、ドイツ人による支配の時代から、第一次大戦後の一時的な独立、そしてナチの侵攻とドイツの敗戦による解放という過程を、すべて体験した者として、次のように語っている。

だが、ブラハのドイツ人集団は、その絶頂期においてすら、有機的な社会でも正常な社会でもなかった。この社会は、常に『支配者』、位階ないしは財力による『支配者』から成っていた。移住民としてブラハにやってきた職人たちですら、富裕なブルジョアになるか、あるいは死に果て、あるいはまた後の世代になって移住するのだった。19世紀を通じて、ブラハにおけるドイツ人集団のこの不合理な社会構造は、ますます悪化するばかりだった。この社会の構成員は、ドイツ化した貴族、つまり外国人貴族、政府部内において上位もしくは中位の要職にある者、ブラハ警備隊の将校、実業家や卸売業者、その他富裕な高級ブルジョワ、大学および工業専門学校の教授、ドイツ人俳優、そして一時的にブラハに滞在しているだけで、このモルダウ河畔の都市の一部になることのなかったドイツ人学生という構成分子などであった。ブラハの郊外には、ドイツのただ一つの背後地<sup>ヒンターランド</sup>もなかった。〔中略〕人民もプロレタリアートももたぬままに、徐々にみじめな少数派に堕ちていったブラハのドイツ人集団は、一つの社会的ゲッターに化した<sup>4)</sup>

ブラークのドイツ人が、その背後に活力を供給してくれる源泉を持っていなかったということは、彼らの社会にとって宿命的且つ決定的な欠陥であった。チェク人にとっては、ボヘミヤが活力源であり、常にブラークと有機的な結び付きを保っていた。特に19世紀後期の農業不況の際には、大量の人口移動があり、ブラークからも溢れ出た農民たちはヴィーン、さらにはアメリカにまで押し寄せたという。そうした状況によって、ブラークのドイツ人は増々少数派になってゆくのだが、彼らは一貫してチェクのものを排除し続けた。もともと統一性のあるものとは言えなかったボヘミヤの伝統は、チェクのものとドイツのものへと、その裂け目を大きくしていった。しかし、ドイツ人社会は、彼ら自身にしか関心を払わなかったから、そのような現象は彼らにとって、問題外だった。彼らは「有機的な社会」は持たなかったにしても、ドイツ系文化人やその文化的施設は、それなりの成果をあげていたし、「ブラークの領域を越える輝き」<sup>5)</sup>を放ってもいた。彼らが相も変わらず営んでいた上流社会の社交的、文化的生活は、むしろ活気に満ちているかのような、様相を呈していた<sup>6)</sup>。

しかし、リルケ個人を観察してみるなら、彼がこれらの断絶した二つの社会に、有機的な関連を見出そうとしていたことこそ、彼の文学の方向性から言って、注目に値する。その政治的意図の有無や評価は問題ではない。『ふたつのブラーク物語』を例にとるまでもなく、ブラーク大学に籍を置いていた頃にリルケが発表した作品には、確かに政治的、あるいは社会的な意図が読みとれるように思われるものが多い。しかし、同時にそれは彼特有の幻想的世界と渾然一体となったもので、彼が持っていたかもしれない政治的社会的意図を、正確に読みきろうとする者を落胆させるのである。だからと言って、それは彼のこの事に関する真面目さを疑う理由とはならない。N. Fuerst も『彼の時代のリルケ』で『ふたつのブラーク物語』をとりあげた時、「しかし、最も驚かされるのは、この“チェク人”学生の世界を自ら理解しようとする誠実な努力についてである」<sup>7)</sup>と言っている。その誠実さが向けられていたチェクのものへの接近という傾向は、彼が大学に入学する頃に始まる。1895年のクリスマスに出された、彼の二番目の詩集『家神への奉げもの』と、その直後の『きくにがな草』の試みは、特に注目されよう。

『家神への奉げもの』を、当時のリルケは、その根をボヘミヤにおろしている詩集である<sup>8)</sup>、と自

評していた。事実、そこではボヘミヤやブラークの風物が数多く唄われている。チェック人労働者の姿を描写した『スミホフ街の裏』は、彼とチェック人プロレタリアートとの、共感の限界を暴露してしまっている、と考えてもよいだろう。しかし、われわれにとって最も良い材料を提供してくれるのは、チェック人の国民的詩人 Kajetan Tyl (1808-1856) に題した作品である。当時 (1895) ブラークで開かれた、このチェック民族の英雄 Tyl の展示会は、ドイツ人側からは完全にボイコットされた<sup>9)</sup>。オムラディナ事件(1893/94)<sup>10)</sup> の記憶はまだ生々しかった。にもかかわらず、若いリルケはこのボヘミヤの愛国主義的詩人を敢えてとりあげたのである。しかも、その詩のなかで、リルケは Kajetan Tyl の詩の題名——この詩は後にチェコスロヴァキア共和国の国歌となる——でもある「わが古里はどこに？」を、原語(チェコ語)のままで二度も繰り返している<sup>11)</sup>。アジテーターが用いるような過激なことばはひとつもないが、この詩がブラークのドイツ人の神経を逆なでするものだったことは疑いない。W. Leppmann は、この詩を書いた 20 才のリルケについて「この詩人があと少しだけ著名であったなら、当時の風潮では、ある種の合図」を出すことになったかもしれない<sup>12)</sup>、と言っている。しかし、これをもって、若い頃のリルケには何らかの政治的傾向があったのだ、と即断することは、彼とブラークの関係における本質的なものを見誤ることになろう。また、チェック民族に対するこのような理解、あるいは理解しようとする努力が、若い頃のリルケのコスモポリタンのものの証明だ、と考えるのも、それ以上に表面的な解釈だ。何故なら、〈コスモポリタン〉ということばには、〈本来所有している祖国を愛国的偏狭に陥らぬために拒否する〉という、意識的、積極的な意図が前提として含まれているように思われるからだ。

いずれにしても、『家神への奉げもの』におけるその特徴的な傾向は、この詩集の直後に企画された『きくにがな草』に受け継がれる。半年毎に編集出版(自費)され、病院や民族・職人組合などの施設に無料で配られた(また、人通りの多い交叉点などで手渡されることもあったらしい)<sup>13)</sup> この小冊子は、その文学的内容よりも、その行為そのものに意味があった。彼の「わたし自らが貧しいのです」<sup>14)</sup> という序文のなかのことばが、その意図を語っている。彼は自分の作品が「もしかすると、民衆の魂のなかでより高い生に育てゆく」<sup>15)</sup> ことを望んでいたのである。晩年のリルケは、このことに関して、次のように語った——「『きくにがな草』を寄贈しようという気持は、それほど社会的なものではなく、むしろ、兄弟のように親し気で人間的なものだったろうと思います。本や精神的な結びつきから、自分が遮断されていたことに起因するものでしょう」<sup>16)</sup> 即ち、ブラークの特殊な状況がなかったら、『きくにがな草』を下層の大衆を主たる対象として企画するという発想は生じなかったかもしれないのである。しかし、ブラークの状況ばかりが彼をして、そういう方向に導いていったわけではない。というのも、ボヘミヤ的なものへの愛着は、彼にとって幼い頃からのものであって、そうした素朴な感情が彼の内面にあったからこそ、ドイツ人学生のリケルが、むしろ自然な要求として、ドイツ人社会の潮流を無視しえたのである。

幼い彼が孤独な学校生活(後には陸軍実科学校の寄宿生活)から解放されて、母と共に過したボヘミヤでの夏休みは、彼にとってどんなに救いであったことか。それは、両親の離別後も、母と生活を共にできる数少ない機会であった。時には、チェック人の少女たちが、彼の遊び友だちになったりもした——「ぼくは三人の小さな女の子と交際しています。みんなほんとのボヘミヤ人ですが、ぼくらはとても仲よくしています」<sup>17)</sup> (リルケが 10 才の頃の父への手紙。この手紙が父 Josef Rilke を不快がらせたことは、想像に難くない。)『家神への奉げもの』のなかの次の詩なども、彼自身のそうした思い出から作られたものだろう。

民謡

ぼくの思いを　こんなに揺する  
ボヘミヤの唄  
密やかに忍び込み  
ぼくの心を重くする

乙女がひとり　微かな声で  
馬鈴薯畑に唄うとき  
夜になっても　その唄は  
おまえの夢に　ふるえつつける

郷を出て  
遠く遙かにゆこうとも  
幾年過ぎて　その唄は  
いつもおまえに　甦る<sup>18)</sup>

現在のところ、この詩は初期リルケの最も代表的な作品となっている。それはボヘミヤへの郷愁によって作られたものだ。そして、この作品によって想起されるのは、既に引用したポーフェシュ青年の「…そのなかにあるもの、たくさんの畑や草地や河は、これは、ぼくらの古里です。これは、ぼくらのものであって、ぼくらはぼくらの内部のすべてによって、これらに結び付いているのです」ということばである。この物語を書く時点では、彼は既にプラークには帰らない決意を固めつつあった<sup>19)</sup>。つまり、この物語のことばが、チェック青年によって語られなければならないものであることを、彼は悟ったのかもしれない。しかし、そこに込められた共感の深さは、彼自身のなかのボヘミヤへの愛着を疑わせるものではない。

「郷を出て/遠く　遙かにゆこうとも」と1895年の彼が唄ったように、リルケはやがてプラークを去る。そして、生涯にわたる遍歴の時代をむかえるのだが、既にプラークが彼にとって陰鬱なものになっていた1907年<sup>20)</sup>、ある男爵夫人の招待を受けてボヘミヤのヤノーヴィツ城を訪れた時、あたかも懐しい古里を紹介するかのように、妻に宛て書かれている——「ガラス化した硬質な秋の夜更に行く列車での旅と、素朴な田園は、既にとても素晴らしいものだった。[中略]そして、これが私の知っていたボヘミヤだった。軽やかな音楽のような起伏をなし、不意にもう一度、林檎林のうしろに平地、地平線は見え隠れして、畑地と並木に区切られて、平坦に、何か民謡のように、リフレインからリフレインへと連なっている」<sup>21)</sup>

しかし、大学生のリルケは、プラークに住むドイツ人のひとりとして、外部からは遮断され、内部からは疎外されるという状況から抜け出るために、プラークからも、従ってボヘミヤからも立ち去らなければならなかった。チェック的なものを理解し、大衆との結び着きを得ようという、リルケの青年らしい希望と努力は、プラークの現実においては、というよりも、ヨーロッパの政治史的力学においては、何の意味も持ち得ない。妻クララへの別の手紙のなかで——彼はこの時講演のためにプラークを訪れたのだった。父のJosefは既にこの前年に亡くなっていた——プラークの街並を再度眼にした印象を、次のように語るのだ——「しかし、且つては仮借なく高慢に私に相対してい

たもの、そして、私に対しては一度も気安くしてくれたことはなかったし、また私たちの間にどんな違いがあり、どんな敵意ある血縁が存在するのか説明してくれたこともなかったものが……」<sup>22)</sup>——そう書いた時のリルケは、ブランクの学生詩人だった頃の自分を、思い出していたことだろう。今や吹き寄せんとしている民族独立の嵐に対し、超然ととりすましたドイツ人官僚社会の人々は、この時もまだ、我が物顔でブランクの街を歩いていたのだが。

ブランクは、彼の古里の街であるにもかかわらず、彼にとって〈気安い環境〉ではなかった。彼は自ら、若者らしい勇気で、手を差し述べてもみた。しかし、その街並は、冷たく、高慢に、彼を見下ろし続けるだけだった。彼らの間には、何の関連も開かれなかったのである。

そして、リルケがロシアこそ自分の故郷だと感じていたのも、そこに原因があった。つまり、ロシアの大地と素朴な人々が、はじめて彼に気安さを示してくれたのだ。彼が旅の途上で出会った何人もの巡礼者はどれも、神の遍在に安んじて身をまかせ、環境を信頼し、いつでもどこでもすべてのものに完全に入りまじれるという、揺るぎない確信を示していた。そして「ヴォルガ河のほとりのある村に滞在したあと、別れぎわにある百姓女が『あんたもただの民衆にすぎないよ』といいながら彼にキッスしたときに彼の燃えるような顔に浮かんだあの表情」<sup>23)</sup>を、ルーは象徴的光景のひとつとして伝えている。それは、「リルケ個人には欠けている原幼年性と原故郷」<sup>24)</sup>が、信頼しうる打ち解けた環境において、彼の内面で予感された瞬間なのかもしれない。それは、裏を返せば、世紀末のブランクに生れ育った彼には、信頼しうる環境が与えられず、従って幼年期に生じるべき全的連関への素朴な、原初的な確信も体験しないままであった、ということになるだろう。その意味でこそリルケのロシア体験は、彼にとって掛替のないものとなりえたのである。

しかし、ロシア体験は彼にとって、万能だったわけではない。というのは、ロシア体験をルーと同様の意味で重視しているハインツ・ポーリツァも「絶望的に疎外を感じていた常人の世界ともう一度伝達を開こうとする」<sup>25)</sup>傾向の詩人のひとりとしてリルケを位置づけているように、失われた自分の幼年時代を取り戻そうという、即ち、全的連関のなかに自分を繋ぎ止めようとする努力が、彼の文学の原動力でありつづけるからだ。

以上述べてきたことは、世紀末のブランクという特殊な状況と、そこで成年期のはじめまでを過ぎたリルケの、彼自身の社会的環境であるブランクに対する関わり方の概括である。それは、彼の次のような詩句に要約されるものかもしれない。

私に 父の家はない  
失ったことさえもなく  
母は この世界へと  
私を 産み落したのだ<sup>26)</sup>

## II. 父親 Josef

リルケの父 Josef Rilke (1838-1906)は、リルケ誕生の頃、既に軍を退き、鉄道会社の官吏になっていた。彼の生地はブランクの北西、エルツ山脈の麓のライトメリッツだが、リルケ家そのものの由来については、確実なことは何もわかっていない。リルケが一族に伝わる古文書や紋章<sup>27)</sup>によって信じていたところによれば、13世紀のオーストリア南部ケルンテンの旧貴族の流れを汲むということである。従来からこの〈ケルンテン説〉は疑わしい眼で見られており、1958年に出された

Hans.E. Holthusen の『リルケ伝』は「人工的に培養された伝承」<sup>28)</sup> とさえ言い切っている。しかし、Ingeborg Schnack の伝えるところでは、1960年に、ボヘミヤのある文書館で発見された古文書のひとつは、この〈ケルンテン説〉を部分的に支えるものであるとのことだ<sup>29)</sup>。それまで多くの研究者が、リルケ家の系譜調査の最終的なものと考えていた Carl Sieber の結論は、新たな資料が発見されることによって、完全なものではないことが判明したのである。W. Leppmann の言うように、この説の信憑性は、明らかにされないまま終るのかもしれない<sup>30)</sup>。そして、われわれのテーマの関連から手短かに言及するなら、この説の信憑性を議論して、リルケとスノビズムを結び付けるよりも、彼ら一族がこの系譜に夢中にならざるをえなかったという、ブラーク・ドイツ人の孤絶化された、不安な状況にこそ眼を向けるべきであろう。

ところで、この系図を立証しようと努力したのは、Josef の長兄であり、一族の家長的存在だった Jaroslav Rilke (1833-1892) だ。彼は法律を修めた高級官僚であり、1873年には騎士の称号を与えられ、また帝国議会議員にもなっている。リルケの写真集などに収められている彼の肖像は、見るからに強烈な意志の力と揺ぎない確信に満ちている。彼自身は典型的な人生の成巧者であった<sup>31)</sup>。

しかし、彼の弟たち三人は、全くの逆であった。Emil, Josef, Hugo は将校を目指して軍人になった。Emil は1858年ルール附近で既に死亡し、末の弟 Hugo は1892年になって、自らの生命を断った。昇進の路が閉ざされていると感じたためだという。

Josef もまた、他の二人と同じように、上流社会に加わるための唯一の方法として、将校を目指していた。彼の生涯は「オーストリア官僚社会のありかたを、身をもって説明するものだった」と、ハインツ・ポーリツァーが指摘したように、一途に上流階級を志向するものだった。そして、彼の場合は、それが成巧したかに思えた。軍人としての教育を優秀な成績で通過し、1859年の対イタリア出兵（イタリア統一戦争）の際には、戦略上重要な拠点のひとつであったブレシアの要塞指揮官として戦った。21才であった。しかし、イタリア統一戦争におけるオーストリアの敗北は、その後の彼の人生と、ハーブスブルク家の内外における位地との両方にとって、象徴的な出来事となるのだった。持病となった首の痛みと、再三にわたる士官昇進の願いが叫えられなかったため、Josef は1865年に軍を退く。一方、息を吹きかえしたオーストリア領内の民族運動によって、内部からも揺さぶられたハーブスブルク家は、1866年の普墺戦争において大敗を喫する。オーストリアのドイツ人は、これによってドイツ統一の主導権をプロイセンに渡し、マジャール人との一種の取り引きによって、オーストリア＝ハンガリー二重帝国を成立させる結果となった。

士官を断念した Josef は、長兄 Jaroslav の仲介で、当時設立されて間もない「トゥルナウクラーループ＝ブラーク鉄道」に官吏として勤める。失意の人だったとは言え、彼はそこで相応の昇進を果し、晩年はひとりで年金生活をおくった。

こうした Josef の人生経路からは、大人物ではないが誠実で謹厳な人柄が滲み出ているように思われる。また、リルケもそれ故にこの父を愛していた。しかし、外面を重んじるという点では、Josef もその妻に劣るものではなかった。それは、リルケの生前には発表されなかった自伝的散文『エーヴァルト・トラギー』の父親役老トラギーという人物に、詳細に描き出されている。日曜の午後の散歩で、息子の帽子についた埃を見つけ、「みんながこっちを見ている。これはスキャンダルだ」<sup>32)</sup> と考えるこの老紳士は、貴族的な振舞をもった名士級の人物である。この老トラギーと Josef Rilke が、その振舞においてほとんど一致していると思われるのは、次のようなエピソードが、事実としてあったからである。それは、リルケが妻クララとマーリエンバートに旅をした時（1903年）のことだ。その保養地で彼ら二人に落ち会うことになった Josef は、それに先立ち、次のように書き送っ

ているのである。

「私はおまえが良い服装でいるように希望する。〔中略〕奇態な服装に眼を奪われぬこと。(ルネにはブラークの仕立屋で背広をひとつ作らせることもできよう。)〔中略〕クララには、残念だが何もしてやれない。しかし、彼女もまた良い服装で出掛けるよう、希望している」<sup>33)</sup>

Josef の生きた一面を伝えているこの私信が老紳士トラギーによって書かれたものであってもよいほどに、作中人物と実在の人物とは酷似している。但し、Josef の私信は、既に彼の経済状態が思ったより逼迫したものだったことを想像させる。それだけに、外面ばかりにとられるこの父親の振舞いが、つまりその貴族然とした態度が、リルケの生れ育った家庭に蔓延していた、そしてそれを取り囲んでいたブラークのドイツ人社会の、根の深い病根を象徴するかのように思われるのである。ある書簡のなかで、リルケは次のように告白している。

「私の幼年時代の家は、ブラークの狭い貸アパートのひとつでした。〔中略〕私たちの小さな所帯は、それは実際には小市民的なものだったのですが、富裕な外見を持つものでなければなりませんでしたし、私たちの洋服は人々を欺くことが必要でした。また、ある種の嘘は当然のこととなっていたのです」<sup>34)</sup>

リルケの幼い頃の家庭が、このような二面性を持たなければならなかったことに関しては、少なくともその家計に関しては、母 Sophie よりも父の Josef に、より多くの責任があったはずだ。しかし、もし、彼に同情するとすれば、当時のブラークは、他のオーストリアの主要な諸都市と同様、急激な人口の増大に伴う大変な住宅難に見舞われていたこと、さらには、N. Fuerst が言うように「政治的権力が、極めて明らかに、またたく間に世界経済へと発展してしまった経済の力によって制限を受けた」<sup>35)</sup> 時代が、この頃既に到来していたということを加味すべきかもしれない。そして、ブラークの経済的基盤は、ドイツ語を話すユダヤ人実業家たちによって支えられていたのだ、ということも。そうした諸条件のなかで、Josef 夫婦は、上層階級の集団であるドイツ人社会に踏み留まるためにも、外面を飾らなければならなかったのかもしれない。神経を疲れさせるこの種の苦労は、彼ら夫婦にとって大きな問題だった。リルケがまだ五才の頃、Josef が43才で転職しようと試みたのも、そのためである。それは、ボヘミヤのある伯爵領地の管理人の職であり、相当の報酬が見込まれたうえ、ブラークを離れることは、都会での生活に疲れた彼の妻の希望にもそったことでもあったため、大いに期待されたが、その計画は失敗に終わった<sup>36)</sup>。その数年後、妻 Sophie は彼と息子のもとを去って行き、二度と共に暮すことはなかった。そして、やがてはそのひとり息子にも一彼が思いとどまらせようとし、また理解しようとしたにもかかわらず一立ち去れることを考えると、彼が耐えなければならなかった孤独の大きさを想起さざるをえない。彼は1906年に、ブラークのアパートメントハウスの一室で、ひとりで、しかし、典型的な名士として、死んでいったのである。後年のリケルは彼の生涯を、彼の息子として、次のように歌っている一

私は正しくないでしょうか 私の生を味わいながら  
私のために人生をあのように苦く味われたあなた 父上よ  
私が成長するにつれて 私の必然の生の  
最初の濁った煮出しをくりかえし味わって



私の奇異な未来に思い悩みながら  
私のさかしらな 曇った仰視を あなたはじっと見まもっておられた—  
父上よ 亡くなってからは しばしば  
私のうちにあって 私の希望のなかで 不安を持ち  
死者のもつ平静を 平静の世界を  
私のささやかな運命のために放棄なさる父上よ  
私は正しくはないのでしょうか……

（富士川英郎訳）<sup>37)</sup>

リケルがこれほど Josef の生涯を思いやるのは、リルケの「必然の生」が彼をブランクに置き去りにしたからばかりではない。むしろ、それにもかかわらず、彼が息子を理解しようと努め、父親らしく手助けをしようとさえしていたからである。彼には息子の人生を自分の手で変えてしまうような強烈な個性も、また財力もなかったが、父親としての義務を果そうという誠実さ（つまり、母 Sophie とは対照的に）が、特徴に欠ける彼の人物に、意志の力によってこの世界を耐え抜こうとする〈ブリッゲ的〉特性を加えているのである<sup>38)</sup>。

父親 Josef と息子リルケとの関係において特徴的なことは、彼らが、自分たちの間の大きな距離を予感しながらも、互いに歩み寄ろうとしているかに思われることだ。この現象は、リルケ自身が、両親の離婚後も、父と母に対する関係において常に等距離に位置しようと努めたように思われることと並んで、際立って眼につく傾向である。

二、三の例を挙げよう。父 Josef は、息子リルケが一家の期待を裏切って士官への道を完全に捨て去ってしまった時、意外に容易にそれを赦した。それどころか、息子が大学に進むための勉強を始めた頃には、本来文学など解さぬはずのこの父親が、シェークスピアやショーペンハウアー、それにスラブ、マジャールの血を受け継いで——即ち、ドイツ東方植民史の申し子のような——数奇な運命をたどった叙情詩人レーナウの作品などを買い与えたりもしている。また、リルケにとって経済的に最も苦しかった最初のパリ時代に、経済的援助を与えたのはこの父親である<sup>39)</sup>。また、リルケの側から見てみるなら、幼年兵学校が彼にとって如何に過酷なものだったにしろ、彼はそれを両親には訴えず、むしろ一家の英雄で、つまり両親の望むような自分であろうと努めたのだった。リンツの商科学校に在籍した頃でさえ、彼は「皇帝の制服を脱いだのは、単に近いうちに再び着るためにすぎない」<sup>40)</sup> という表面を装っていたのだ。そういう曖昧さは、彼が大学に入る頃には解消され、上に引用した『悲歌』の一節にも明らかなように、一時的には両親を卑下する時代もあったことは確かなことだ。しかし、そういう時代においてすら、父親に対する息子リルケの感情は、エディプス王の神話に象徴されるような〈暴君に対する反逆〉として表現しうる種類のものとはならない。それは、リルケがブランクのドイツ人社会に対する訣別の書として書いたと思われる『エーヴァルト・トラギー』において、余りに明確に現れている。それは息子トラギーの将来についての親子の口論に続く場面だ—

にもかかわらず、彼は時折注意深く向うに眼をやる。そしてどこまでも荒れ果てた歩道を、その年若い男がひどく頼りなげに歩いているのを見ると、何か不安な気持ちになるのだ。あの人はなんてひとりぼっちなんだろう、と彼は思う。そして、もしあの人に何かあったら……。〔中略〕ようやくその両者が同じ家の前に立つ。玄関に入る時、エーヴァルトが懇願するように言う—「パパ、」彼は一瞬曖昧に口ごもり、それから一気に「禁を立てなければ、パパ、」いつも今時分の階段はとても塞いですからね、と言うの

である」<sup>41)</sup>

若いリルケの肩には、力を込めて振り捨てるほどの、父からの重みというものが、少しも掛けられていなかった。彼にとって、父の像は既に年老いて、人生に疲れ果てた人でしかない。それは、この父親が失意の人であったことと関係している。しかし、もっと深く関係しているのは、彼ら一族がブランクに根を張ってもいなければ、また土着の伝統とも何ら関連を持たないままだったという事実であろう。何故なら、初期のリルケの芸術観が、既に明確にそれを物語っているからだ—

…芸術はいわば幼年時代のようなものです。芸術とは、世界が既に在る、ということを知ることでなく、ひとつの世界を創るということなのです。ただ、現に在るものを破壊するというのではなく、単に何も出来上がったものはないということを感じとるということです。可能性ばかりが、希望ばかりがあるのみだ、ということ<sup>42)</sup>。

このような観念は、彼が自分をリルケ一族の「最後の人」<sup>43)</sup>であると認識していたことと、大いに関連している。その議論は別の機会に譲るとして、ここでは、若い時代のリルケが、ブランクのドイツ人として生まれたことによる、環境と伝統からの遮断を、既に根無し草的な父親の姿に認めていたのだ、ということを描きおきたい。彼はしたがって、父親の世代に、何ら評価すべきものを見出さない。「出来上がったものは」何ひとつない、と感じているのだ。脈々として伝えられた伝統は、既に彼の眼前で色褪せており、彼は一族の最後の者として、振り捨てるべき何物もなく、孤立している。「私に父の家はない、失ったことさえもなく」と彼は唄う。そして、この観念は、母親から受け継いだ非現実の夢想と結び付き、彼特有の詩のスタイルに大きな影響を与えるのである。即ち、現に明確な輪郭をもって存在するものを、容易に単なる可能性へと解消してしまう、ある種の軽快さである。それは同時に、底知れぬ不安の表現でもあるのだ。

(以下、Sophie とリルケの問題等々については、別の機会に論ずることとする)

## Anmerkungen

- 1) 後に言及する「絶望的に疎外を感じていた常人の世界ともう一度伝達を開こうとする」詩人のひとりとしてのリルケ。註25)参照。
- 2) Rainer Maria Rilke/Anita Forrer: Briefwechsel, hrsg. v. Magda Kerényi, Frankfurt/M. 1982, S. 46.
- 3) Rainer Maria Rilke: Werkausgabe (以下、WAI-XII と略す) VII, S. 116.
- 4) バーヴェル・アイズナー: 『カフカとブラハ』金井裕、小林敏夫訳、審美社、1975, S. 20f.
- 5) Wolfgang Leppmann: Rilke, Sein Leben, seine Welt, sein Werk, Scherz Verlag, Bern und München, 1981, S. 61.
- 6) クラウス・ヴァーンバッハ: 『若き日のカフカ』中野孝次、高辻知義訳、竹内書店、1969, S. 66f.
- 7) Nurbert Fuerst: Rilke in seiner Zeit, Frankfurt/M. 1976, S. 16.
- 8) Ingeborg Schnack: Rainer Maria Rilke, Chronik seines Lebens und seines Werkes (以下、Chronik I-II と略す) I, S. 37.
- 9) Vlg. Rilke Kommentar zum lyrischen Werk, hrsg. v. August Stahl, München, 1978, S. 76.
- 10) 八戸工業大学一般教育部『研究会会誌』第8号(1983), S. 22 参照。
- 11) WAI, S. 38f.
- 12) W. Leppmann, S. 63.
- 13) a.a.O., S. 65.
- 14) WAV, S. 112.
- 15) a.a.O. S. 112.
- 16) Rainer Maria Rilke, Gesammelte Briefe, hrsg. v. Ruth Sieber-Rilke u. Carl Sieber, 1937, Insel-Verlag:

Produced by RINSEN BOOK CO., Kyoto, 1977, (以下, GBI-VI と略す) V, S. 321. また、当時はまだ、遠隔地ブラークと他のドイツ諸圏とを結ぶべく交通、通信のシステムが充分ではなかった。それは、ブラークの言語状況の劣悪さからも推定しうるころだ。リルケがここで、精神的な結び付きばかりでなく、本（複数形）からも絶縁状態にあった、と言っているのは、そのような流通上の問題に起因している。そして、そういう状況にあったからこそ、ブラークのドイツ系文化人は、著作、雑誌、新聞などによって伝達しようと、異常なほど活発な活動をしていたのだと思われる。ブラークの内部においては、彼らは最大限でも数万足らずの読者を見込めるだけだった。そして、彼らもまた同時に受け取り手でなければ、その文化社会は成り立ってゆかなかったのだ。ブラークの読者層については、W. Leppmann, S. 61f. また、言語状況については、K. ヴァーゲンバッハ、『若き日のカフカ』, S. 75.

- 17) Chronik I, S. 14.
- 18) WAI, S. 39.
- 19) 1897年9月5日付、ルー・アンドレアス・ザロメへの手紙で、リルケは次のように言っている―「昨日は長い一日でした。そして私は、予定しておいた事のおおよそは、成し遂げました。つまり、私がブラークにはほとんど関わりを持たなくなるだろう、ということにはまだ触れずに、父に手紙を書いたのです。その時までには尚数通の手紙を彼に書いて、必ずや、彼をあまり驚かさずにこの件の了承を得る機会を見つけ出します」彼はこの頃、既にルーの影響下にあり、René から Rainer に改名している。『ふたつのブラーク物語』は、頂度このベルリン時代に書かれたものである。Rainer Maria Rilke/Lou Andreas-Salomé, Briefwechsel, hrsg. v. Ernst Pfeiffer, Frankfurt/M. 1975, S. 23.
- 20) リルケは1907年10月24日付、Sidonie Nádherný von Borutin への手紙で、ブラークに行くということが「私の父の死後となっては、ほとんど陰鬱で重苦しいだけのことになっているのです」と書いている。Rainer Maria Rilke, Briefe an Sidonie Nádherný von Borutin, hrsg. v. Bernhard Blume, Frankfurt/M. 1973, S. 39.
- 21) GBIII, S. 11f.
- 22) a.a.O., S. 7.
- 23) ルー・アンドレアス・ザロメ, (著作集4)『ライナー・マリア・リルケ』伊藤行雄, 塚越 敏訳, 以文社, 1973, S. 28.
- 24) a.a.O., S. 23.
- 25) ハインツ・ポーリツァー:『ブラハ生まれの詩人たち』尾住秀雄訳;『カフカとその周辺』喜多尾道冬編, 審美社, 1974所収, S.74.
- 26) WAI, S. 395.
- 27) この紋章は、彼自身の遺言により、リルケの墓標の上部に刻み込まれている。Vgl. Rainer Maria Rilke, Leben und Werk im Bild, hrsg. v. Ingeborg Schnack, Insel Taschenbuch 35, S. 251.
- 28) Hans Egon Holthusen: Rainer Maria Rilke, Hamburg, 1958, S. 9.
- 29) Chronik I, S. 10.
- 30) W. Leppmann, S. 20.
- 31) ルーは、伯父 Jaroslav こそ、『マルテ・ラウリッツ・ブリッゲの手記』における侍従老ブリッゲのモデルだ、と指摘している。Vgl. ルー・アンドレアス・ザロメ, S. 12.
- 32) WAVII, S. 513.
- 33) Chronik I, S. 171.
- 34) GBI, S. 332.
- 35) N. Fuerst, S. 14.
- 36) Chronik I, S. 11.
- 37) 『リルケ全集第3巻』彌生書房, 1973, S. 23.
- 38) 『マルテの手記』の相対する二つの構成要素として、Walter H. Sokel は〈ブリッゲ的なもの〉と〈ブラーエ的なもの〉を次のように規定している―「ブリッゲ的なものとは、ある一点へと育成を遂げてゆく者、有機的に自己を展開してゆく者の原理であり、とり替えることのできない個有性の原理、独自のものの原理である。ブラーエ的なものは、とり替えられうるものの原理、形と時間的段階が互いに融け合ってしまうもの、判別し難いものの原理だ。それはまた、あらゆる限界を解消させてしまうものの原理であり…」Vgl. Walter H. Sokel, Zwischen Existenz und Weltinnenraum: Zum Prozeß der Ent-Ichung im Malte Laurids Brigge, in: Rilke heute I, Beziehung und Wirkungen, hrsg. v. Ingeborg H. Sobrig u. Joachim W. Storck, Suhrkamp Taschenbuch 290, 1975, S. 106.
- 39) リケルは当時、結婚(1901年4月28日)を理由に、彼の従姉にあたる Irene と Paula からの支送り〔これは伯父 Jaroslav が一家の長として、一族の唯一の後裔リルケに約束したもののだが、Jaroslav の死後(1892)

は、彼の娘たちによって〈面倒な義務〉としてではあるが、続けられていた]を止められ、経済的窮地にあった。詩人の彼が『ロダン論』を書くことになった誘因のひとつは経済的な問題だった。Vgl. GBI, S. 328ff.

40) Chronik I, S. 20.

41) WA VII, S. 518f.

42) a.a.O., S. 229.

43) 註 39)でも触れたが、伯父 Jaroslav の息子たちは、すべて幼くして亡くなったため、リルケ家の名を後世に伝えるべき男子は Josef のひとり息子であるリルケだけとなった。そのため当時の彼は、〈古い一族の最後の者〉という状況設定を好んで詩や散文に取り入れた。H.E. Holthusen は、この傾向を更に一般化して「それはホーフマンスタールからトーマス・マンまで、世期末文学の至る処に広まっていた想念、即ち、己のなかで古い高貴な一族の血が終りを告げている、純化され孤立化した後継者として、芸術家は最後の、崇高な華を開かせる、という想念」だとしている。H.E. Holthusen, S. 8.